

『仏陀銀行』の実践とBNN

本多 静芳

近代の原理が抱える問題を、次の言葉を通して提起したい。一九二〇年代に初版となる『パパラギ～はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』（エーリッヒ・ショイルマン編、岡崎照男訳、立風書房）という書で、サモア諸島ウポル島の酋長ツイアビが、二〇世紀初頭ヨーロッパを巡り、西欧文化と生活様式について知りえた知識を故郷の島の人びと語りかけている内容とその視点は今も現代の私たちの生き方を揺さぶる。

「おまえたち、明敏なわが兄弟よ、わたしたちはみな貧しい。太陽の下、私たちの国ほど貧しい国はない。私たちのところには、箱いっぱい丸い金属もなければ重たい紙もない。パパラギ（白人）の考えからいえば、私たちはみじめな物乞いなのだ。

だがしかし！おまえたちの目を見、それを金持ちのアリイ（紳士・男）の目と比べるなら、彼らの目はかすみ、しぼみ、疲れているが、おまえたちの目は大いなる光りのように輝いている。喜びに、力に、いのちに、そして健康にあふれ、輝いている。おまえたちの目は、パパラギの国では子どもだけしか持っていない。

言葉も話せない、それゆえお金のことは、まだ何も知らない子どもだけしか。

大いなる心は、私たちをアイツウ（悪魔）から守ることによって、私たちを愛してくださった。お金がアイツウである。その仕業はすべて悪であり、悪を生む。お金にさわったものは、その魔力のとりことなり、それをほしがるものは、生きているかぎり、その力もすべての喜びもお金のために捧げねばならない。もてなしをしたからといって何かを要求したり、何かをしてやったからといってアローファ（贈り物・交換品）をほしがるとな人間を、私たちは軽蔑する。という尊いならわしを、私たちは大切にしよう。ひとりの人間が、他の人たちよりずっとたくさんの物を持つとか、ひとりがうんとたくさん持っていて、他の人びとは無一物、というようなことを私たちは許さない。そのならわしを大切にしよう。そうすれば私たちは、隣の兄弟が不幸を嘆いているのに、それでも幸せでほがらかにしていられるあのパパラギのような心にならずにすむ。」（pp.46-47）

「おお、兄弟たちよ、こんな人間をどう思うか。サモアの一つの村なら村びと全部がはいれるほど大きな小屋を持ちながら、旅びとにたった一夜の宿も貸さない人。こんな人間をどう思うか。手にバナナの房を持ちながら、すぐ目の前の飢えた男に乞われても、ただの一本も分けてやろうとしない人。

私にはおまえたちの目に怒り、唇には軽蔑の色の浮かぶのが見える。そうなのだ、これがいつでもパパラギのすることなのだ。たとえ百枚のむしろを持っていたても、持たないものに一枚もやろうとはしない。それどころか、その人がむしろを持っていない、と言って非難したり、むしろがないのを、持たない人のせいにしたりする。たとえ小屋のてんじょうのいちばん高いところまで、

あふれるほどの食物があり、彼とアイガ（家族）が一年食べても食べきれないほどでも、食べるに物なく飢えて青ざめた人を探しに行こうとはしない。しかもたくさんのパパラギが飢えて青ざめて、そこにいるのに。」(p.73)

はじめに

近代化とは、自らの内にある貪りの心を、コントロール可能な経済原理を形成することで暫定的に容認し、自我の欲望の満足を発展・展開させてきた。しかし、仏陀の教えに生きようとするとき、その原理が内包し又、統御不能になっている現実問題に気づき、それを批判し、新しい原理を掲げるという形で、共生の可能性と実践を生み出していく道が求められる。

本稿は、現在、仏教の縁起の視点から、アジアの諸地域（カンボジアで三カ所、タイで一カ所、低賃金労働者に向けて、登録者数3000名以上、小規模融資は45例）で小規模金融をもとに『仏陀銀行』を展開している日蓮系仏教僧侶、井本勝幸上人の活動を紹介し、上記の道を求めることを本旨とする。井本師は、アジアに広がる仏教徒のネットワーク「四方僧伽」で、普く人々に幸福をもたらす経済のあり方を追及し、現地で人びとに寄り添う活動を展開している。

なお、この論考は、二〇〇九年一月十日、「宗派を超えてチベットの平和を祈念する僧侶の会（以下、SS）」関東ブロックで井本師を講師に迎えた築地本願寺での講演会「国際チベットサポート会議の報告・仏教経済学概論」と、同年十月一日、慶應義塾大学においてBNNの主催によって行われた第二回公開セミナー「仏教者の実践に活かす経済学知識～『仏陀銀行』の実践～」(パネリストとし

て井本師が参加）などをもととして仏陀銀行の今を把握しようとするものである。

なお、「宗派を超えてチベットの平和を祈念する僧侶の会」（SS）とは、その趣旨を「ブッダの叡智が息づく聖地、チベットに平和を」と掲げ、次のような活動をする仏教者の集いである（同会チラシより。なお、筆者は創立時より幹事として関わる）。

私たち「宗派を超えてチベットの平和を祈念する僧侶の会」は、今日、中国政府の下で、チベット人の生命、文化、民族性を含むアイデンティティすべてが消滅の危機に瀕していることを深く憂慮し、ブッダの大悲に根ざす正当な怒りによって、その是正を強く訴えます。

チベットでの弾圧が、人類の叡智の結晶ともいえるチベット仏教への蹂躪として進行している現在、チベット問題は、わたしたち人類全体が直面している「慈悲（愛・憐れみ・仁）の危機」を象徴しているのではないのでしょうか。

とするなら、チベット問題の克服とは、人間性を踏みにじる物質主義が謳歌する現代世界に、慈悲の価値を再びよみがえらせることにほかなりません。これらは、日本社会における弱者、自殺やいじめ問題の解決、世界各地に蔓延する暴力と格差と貧困の克服への道と、深く重なり合うものです。

こうした視点から、私たちはダライ・ラマ14世の提唱する非暴力と対話による解決を支持し、慈悲の精神をもって問題の平和的な解決に取り組みます。私たち日本人僧侶は、ここに宗派を超えて結集し、チベットにおける真の平和と自由を実現していくことを強く求めます。

一方、BNNとは、仏教NGOネットワークの略であり、事務局を置き、様々な仏教NGOを統合し、国際協力活動をする超宗派の組織である（筆者は、同組織の企画委員を委嘱されているものである）。その活動内容は、そのHPによると以下の通りである。

1. 会員相互や関係団体同士の親睦と研鑽を深め、国際協力を学ぶために年3回のセミナーを開催。
2. 国内外で起こる災害等の緊急援助の支援。
3. 日本の仏教NGOの活動や存在を広く国内外にアピールするために仏教NGOのダイレクトリーを作成。

以上のほかに、近い将来、国際問題やNGO活動に関する情報を提供するデータベースなどの機能を設ける予定。

この会は、仏教を基盤に活動する組織及び個人を対象として、次のような会員によって構成される。

1. 仏教NGO。
2. 国際協力活動を行う、あるいは国際協力活動を支援する仏教教団、仏教連合体。
3. 国際協力活動を行う、あるいは国際協力活動を支援する仏教寺院および教会。
4. 国際協力活動を行う、あるいは国際協力活動に関心のある仏教者。

この論考は現在進行中の仏陀銀行の営みを捉えようとするものであり、決して固定的で客観的な評価や数値を示すものにはならない。しかし、人間の営みとして作り上げた近代の構造を問い直すという視点を抱えるものであり、そのまま、私たちの経済活動を仏教の視点から問い直す可能性を持つと思われる。

特に、二〇〇八年、アメリカから始まった世界的な金融危機は、グローバリズムと経済原理が世界の人びとを巻き込む問題だということを改めて確認させられた。しかも、グローバリズムは、元々、「大国による搾取や抑圧や侵略という形」で存在していたといわれている。¹⁾「そのような社会の構造から生まれる人間の苦悩を見つめる活動に関わるのが、仏教者の実践であり、仏陀銀行はまさにその営みそのものといえる。

何故ならば近代とは、経済的原理が政治・文化などのあらゆる側面に後退不能な影響を与えている状況だと思われる。そして、その原理に立って無明の上に貪りを続けようとする者とは、仏の眼からすれば、対象的に誰かであると措定し、批判していくではなく、この私自身が近代主義の中で、その営みを望みつつ、また、それを生きていることが見抜かれるからである。

一、BNNの理念と慈悲

BNNとは、紛争や貧困、環境等という形で、絶えず作られる人間の苦の現実を仏教によって課題にした様々な仏教者のNGOネットワークである。以下、BNNの設立の趣旨を同会の資料をもとに紹介する。

「紛争や貧困、そして環境等の諸問題という形で絶え間なく立ち現れる苦の現実。ここにあって人と人との顔が見える関係を基に、苦を共に担い、慈悲を実践しようとする多くの仏教者がいます。また、様々な民族・宗教・文化の違いを超えて理解し合おう、尊重し合おうとする仏教系NGOの取り組みがあります。それは仏教の教える「縁起」の世界観の顕現とも言えましょう。

一九八〇年代より、インドシナ難民やアフリカ飢餓への救援活動等を契機に、日本の国際協力NGO活動は活発化し、団体数も増加しました。その中にはいわゆる仏教NGOと呼ばれるものも多く数えられます。布施するものとされるものがまったく平等であるとする仏教精神を背景とする活動は、キリスト教などを基盤とする欧米のNGOとは質を異にした活動様式を生み、大きな評価を得ています。

その成果をより有意義に活用すべく、ここに仏教NGOのネットワークを構築することといたしました。各団体や個人が、規模の大小や活動分野・地域の別こそあれ、お互いの経験を共有しあい、それぞれの経験に学ぶことは自身の活動をより発展させる上で欠かせないことです。また、自分の活動が抱える悩みは、先人が同じく悩み、克服してきた例であることも少なくありません。さらに、各団体や個人をネットワークすることで仏教者の社会活動を世間にアピールし、新たな活動者が生まれることが期待されます。本ネットワークは仏教NGOの相互の交流を通じて、各活動の発展を促進するとともに、活動に関わる多くのいのちが本当に輝く社会の実現に資して参ります。」

二〇〇九年十月一日のBNN主催の第二回公開セミナーは、「仏教者の実践に活かす経済学知識～『仏陀銀行』の実践～」と題して、二人のパネリストからの発表と対談、そして会場からの質疑に応答するという形式で進められた。

仏陀銀行を提唱し実践する井本師と、経済学を専門とする慶應義塾大学経済学部長の塩沢修平教授の提言が、様々な立場の人びとの抱える現代社会の問題を多面的に捉える機会になればという願いをこめた集いでもあった（筆者は、そのコーディネイターを勤めた）。

一般に仏教者の社会参画というと、さとりを開いた仏陀の慈悲の実践という言葉で理解されることが多い。しかし、仏教の言葉は人口に膾炙するうち、異なる意味で理解されるものが多くある。

元々、慈は、サンスクリット語でマイトリーといい、友愛と訳され、友の間に生じる相手を思う精神をいい、また悲は、カルナーといい、呻きと訳され、我が子を思う親に生じるような、我が子の痛みや苦しみを我が痛みや苦しみとして思う精神をいう。

ところが今、慈悲というと、より高い立場のものが、低い立場のものに何かを与える行為という意味合いで受けとめられ、また、そこには同時に無意識のうちに、強い立場の抱える価値観が弱い立場へ押しつけられるという意味さえ含まれることもある。

今、仏教者の社会实践、つまり慈悲ということを理解するのに、対治と同治という言葉が大きな示唆になる。

対治とは、発熱をした場合、冷やして下げること、また悲しむ人がいたら元気を出せと働きかける対応をいう。一方で、同治とは、発熱した場合、むしろ十分に身体を温め、汗をかかせて熱を下げること、また悲しむ人には、その人に寄り添い一緒に涙を流し心の重荷を軽くして悲しみから立ちなおさせる対応をいう。

つまり、対治は現状が駄目だという相手の現状否定から始まるが、同治は相手の現状を一旦容認する態度で、そのことによって慈悲する立場のものも共に問題に関わり、深く共感し合い、共に認め合える問題解決の世界にまで導かれるものである。慈悲とは、この同治の精神にもとづく仏教者の社会实践であり、実際のNGOの現場も、まさにこのことの確認作業だといえる。

つまり、健康がよくて病は駄目、裕福がよくて貧困が駄目、進歩がよくて停滞は駄目という優劣の見方というものが、実は事実を事実として引き受けられない生き方であり、迷いにもとづいており、

その立場に立つ限り気づかない内に問題を生みだしていると仏教は理解する。今日の近代社会のものの見方が、すべてそのような価値の押しつけであるとは言い切れないが、少なくとも、その社会の価値基準は、その社会の成員が自覚的にならない限り、無意識のうちにその優劣の価値を自らが受け容れ、そして、他者に押しつけている。

しかしながら、この優劣の見方は行動の心理的な支えとなっているので、人に対して「やってあげている」という親切心の根拠となり、世間では肯定的な意味で善意の行為と受けとめやすい。よく考えれば暫定的で相対的な価値を相手に押しつけているだけならば、双方ともに気づかないままならば、仏陀の慈悲とは大きく異なるものである。

二、「四方僧伽」の理念と仏陀銀行

現在の金融市場最優先の経済活動のあり方を問題にしようとする井本師のNPO法人「四方僧伽」は今述べたような仏教の慈悲を背景にしている組織といえる。

経済のグローバル化の流れのなかで、金融危機という事態が起こり、「不況」だといわれている。格差社会が深刻化し失業者が溢れる一方、その対極に一部の人々がより豊かになっていく経済システムが問題として報道で論じられる。

そうした状況の中で、僧侶たちが主宰するNPO法人「四方僧伽」がアジア諸地域などで仏陀銀行の提唱する地域通貨や、小規模融資の試みを重ね、仏教者として社会問題に取り組み一定の効果を上げてきた。

先ず、「四方僧伽」の仏教理念を確認しておくことにする。『広説

仏教語大辞典』（東京書籍）などによれば、僧伽とはサンスクリット語のサンガの音写で、意味合いから「衆」、「和合衆」と漢文に訳された。

もとの意味は「集まり」「集団」「集会」などで、古代インドでは政治的には共和政体、経済的には自治組織をもつ同業者組合のことをサンガと呼んだ。

僧伽は、略して僧とも称し、仏教に生きようとする者が拠り所とする三宝〈仏・法・僧〉の一つとして尊重され、仏教徒になる入門式や仏教者の集いの際の帰依の対象となっている。

もともと、仏教の僧伽は仏陀の教えを学び、実践し、その教えの真実を世間に示し、帰依者を教化し、教えを次世代に伝えるという意味の集いである。

狭義の僧伽は、男性の出家者（比丘）と女性の出家者（比丘尼）の教団（比丘・比丘尼僧伽）を指す（二部僧または両僧伽）。

広義では、現実到目前に成立している僧伽を現前僧伽といい、一つの所に四人以上の僧侶がいれば、僧伽が組織ができるとされている。

さらに将来、仏教教団に入ってくる人びとまで含め、過去現在未来の三世を貫く理念上の僧伽を四方僧伽と呼び、これこそが普遍（常住）の僧伽だという意味を持ち、仏陀の教えを生きようとする人びとがいれば、僧伽がいつでもどこにでも成り立つということになる。

また、僧伽の精舎（土地や建物）、什物（備品）などは四方僧伽の所有とする精神があり、このような理念をこのNPO法人「四方僧伽」は掲げており、「全世界で仏陀の精神によって生きる人びとの集い」ということを提唱している。

まさにその視点から現代社会の経済システムに対する疑問を提

示し、仏陀銀行とは四方僧伽の具体的顕現としての展開をしているといえるだろう。では仏陀銀行とはいかなる営みなのか、「四方僧伽」の説明を示しておく。（同会のチラシ、及び、同会のHP、<http://www.k3.dion.ne.jp/~catudisa/sub8.htm>）

・ 仏陀銀行とは？

グローバリゼーションという、行き過ぎた資本制経済は、『格差』を衝いて自己増殖するマネーの暴力によって、世界中の地域を剥き出しの弱肉強食社会へと追いやりました。世界を分業体制にしたグローバル経済は、通貨戦争や大規模自然災害、金融危機の度毎にその脆さを露呈し、常に世界中の弱者の側がそのしわ寄せを被るかたちで疾走しています。今日の世界が抱える環境破壊も貧富格差の増大も人権問題の等閑視も戦争も、すべては現代の金融システム（経済）に起因しています。そして、その大本は、『格差』を生み出す『利子』の存在にあります。

『仏陀銀行』は、そうした社会矛盾を根底から問い直し、『超・地域通貨』と『小規模融資』を融合することで成り立つ『無利子銀行』によって世界システムを変換し、慈悲にもとづく真に人間的な世界を実現する『世界維新』へのプラット・ホームです。

・ 世界市民通貨（地域通貨）＝BD（ボーディー）のメリットは？

仏教が縁を取り持つ仏陀銀行は、新たな世界規模の消費者運動として、最終的にパワーだけがモノを言って弱国・弱者を抑圧する不条理な国際政治に対し、グローバル・ボイコット（一斉不買運動）や主要通貨（人民元、米ドル、ユーロなど）の戦略的売買介入等によって、有効な非暴力的『世界維新』勢力となり得ます。現13カ国ネットワーク、20億人規模の人口は、それを可能とするに十分な

潜在力を秘めています。

・預金者のメリットは？

- 仏陀銀行が世界各地で実施する個々人～コミュニティの自立を支援する無利子の小規模融資（マイクロ・クレジット）事業に充てられます。
- ご預金を解約されない限り、受益者から返済された返済金は次の自立支援への融資へと循環的に使われることになります。（ご希望の支援先を指定することもできます。）
- それは新しい国際協力のかたち、地域の活性化のかたち、次世代と地球の環境を守ろうとする人の道にかなった循環型経済圏づくりへの貢献です。
- 仏陀銀行コミュニティごとに設置される仏陀銀行委員会のメンバーになり、小規模融資先の選定等、仏陀銀行の運営に主体的に関わることができます。
- 無利子銀行のため利子はありませんが、お引き出しも可能なもうひとつのタンス貯金です。

以上のように説明され、その具体的な運用を次のように示している。

・世界市民通貨（BD）と小規模融資（マイクロ・クレジット）について

●世界市民通貨（超・地域通貨）について

単位：ボーディー（Bodhi、BD、菩提）

換算基準：1 BD＝1 円。但し、換金は不可

様体：紙幣もコイン（硬貨）も不使用。通帳のみを使用。（偽造の不可、通帳＝メンバー証）

利用方法

- ・ 個々人の職能を（通帳を通して）相互に交換し合う。（交換リング形式）個々人の提供できる職能と提供して欲しい職能をリスト化して広報する。
- ・ リストには個々人の職能リスト・連絡先を明記する。
- ・ 価格は2者間合意。（銀行は必要に応じて仲介する）（相殺原理＝ゼロ・サム理論＝空）
- ・ 取引は相互に通帳に差し引き合計金額を記述し、サインする。
- ・ 取引後に「仏陀の銀行」に報告する。
- ・ 職能提供を受けるだけで、自らの職能提供が行われない場合、1週間ごとにマイナス総額の10%分を国家通貨（現金）で返済する義務を課す。（「ゲゼル理論＝マイナス利子」の応用）
- ※一方的な利用のみの参加を防止する。

これは同時にBDの消費を奨励することにもなる。

- ・ BD通貨利用者のみが、後述の小規模融資（国家通貨+BD）を利用することができる。
- ・ 銀行員はBD利用者を増やすことを主な仕事とする。（職能力の増加＝高度な自給へ）

効能・効果

- ・ コミュニティーの自立（グローバリゼーション経済に対峙する高度な自治）
- ・ 国家通貨への依存度の低減（家計のセーブ）
- ・ 誰もが地域作りに参加できる（高齢者、失業者、引きこもり、学生、主婦 etc）
- ・ 非匿名性による顔の見える地域作り（モラル・ハザードへの抵抗）
- ・ 銀行は、国家通貨を貸し出す小規模融資事業にBDを混ぜて行

うことで無利子銀行を実現する。

・「お金」は人間のツール（道具）であることの再認識」

三、「井本勝幸師の仏陀銀行の主旨を聞いて」

二〇〇九年一月十日、SS関東ブロックで、同会幹事である井本勝幸氏を講師に迎え、浄土真宗本願寺派築地別院にて講演会を開催した。テーマは「国際チベットサポート会議の報告・仏教経済学概論」である。SSのHP（<http://www.supersamgha.jp/2009/02/post-15.html>）によれば、

チベット問題を始め、世界各地で止むことを知らない紛争の背景には、現状の経済システムがある。貨幣経済が隅々まで行き届く一方で、貧困層の固定化が進み、教育チャンスから排除される人々を生む。追い詰められた貧困層は、より低賃金、より悪環境へと追い詰められ、暴力やエイズの誘引など負の連鎖を招き続けている。こうした貧困層を拡大し続けることで成り立つ現在の世界経済のあり方とチベット問題は決して無縁ではない。むしろ、今日の経済のあり方、金融資本のあり方、市場経済のあり方の中に、チベット問題をはじめとする世界各地の紛争の根っこがあるのである。

『苦しみの因を問う』ことを基本的な姿勢に持つ仏教徒として、社会の仕組みが苦しみの多くを生み出しているのではないかと、この気づきからこの苦の原因を探り、そのような苦しみを生み出すシステムからの脱却を目指すことは、大切なことではないだろうか。

そこで、あらためて「チベット問題の解決のためには、いったい

何が必要なのか」という問題意識から、関東ブロックでは、問題解決に向けて経済システムのあり方を問い直す学びの場を設けた。

講師の井本師は、アジアに広がる仏教徒のネットワーク「四方僧伽」で、普く人々に幸福をもたらす経済のあり方を追及し活動している。

と示されている。以下は、SSの幹事でもある筆者による、当日の講演と前日の幹事同士による話し合いのまとめとレポートに、若干の加筆をしたものである。なお、傍線は筆者自身によるものである。

○現行の金融システムとは何か？

井本師の仏陀銀行の設立の意義を学ぶことによって、今まで理解していなかったことが沢山分かってきた、ということに非常に大きな意味があると思う。

先ず、現在の経済金融市場に無自覚に関わることで、結果として、西洋型の経済資本主義の市場のあり方を容認してしまっているということだ。そして、それは必然的にそこに派生する利子を巡って投機的な金融の分配を偏って成り立たせることになる。確認すれば当たり前のことだが、普段気づくことのなかった認識を持つことができた。

ところでこの投機的市場を背景にする莫大な金融の動きは、実質経済を伴うことがないまま経済的な富の偏在をもたらすことになっている。例えば〇七年の国際間の金融取引は年間約三〇〇兆ドルといい、相場の成り立つ日毎に平均すれば一日一兆ドルであり、しかもその九〇%以上が投機的な短期資金が動いているに過ぎないという。

そのために、こうしたあり方を問いにせず、現在の金融市場をそのままにして被援助国に開発のためだといって経済的な支援を行うことは、一時的な富の移行を貧困社会にもたらしめて、結果として現在の金融市場を温存させ、かえって従来通りの富の偏在に無意識のうちに加担することになる罪作りに過ぎないという。

○アジアの経済システムを見つめる

経済システムそのものを問いにしないままで、NGOや、経済的に金融支援にボランティアとして関わることは、こうした理由によって、根本的な問題解決をもたらすものではなく、現在の金融市場主義を再補填するのに過ぎないというのが井本師の主張である。

この主張は、現在、一般的なNGO活動をしている諸団体などにとって、いささかショッキングなものである。しかし、政府主導の低開発国支援という名で行われているODAが、今までに大きな経済的な不均衡をもたらしてきたことは周知の事実である。このような現実の背景には、現在の経済市場で資本の扱われ方が、実質経済を伴わない投機的な金融市場によってなりたっている問題点があると井本師は指摘する。

さらに、現在の一般的な西欧型経済システムが富の偏在をもたらしているために、本来、経済的自立が可能なはずのアジア諸地域の多くの人びとが、ほんの少しの借金を形（かた）に、生涯に亘ってその返済に振り回されているという。そうしたアジアの現実直面した師が、新たに主張し立ち上げたのが仏陀銀行である。

それは、西欧金融市場が投機的な虚構の経済を展開して、農耕、漁業、林業、手工業など、第一次産業という現実的な人間の営みに対して融資をすることで、利を受けるべきであるそれら第一次産業の人びとに、むしろマイナスの結果を出していること（元金の返済

どころか生涯利子を払い続ける人びとの増加）の反省から生まれた全く新しい金融システムである。

現在の投機的金融が跋扈してきた背景にあるのは、利子という名で生まれる架空の経済価値であり、それは実質経済活動を伴うものではないと井本師は指摘する。無論、現在のシステムの中にある人びとは、利子の存在を決してそのようには思わないし、それをまるで空気のように当たり前のものと受けとめている。私自身も井本師の説明を直接聞くまでは自分の問いにならなかった。利子によって、架空の経済価値が生まれている以上、それは結果としてマイナスの現実的な経済損失を被る人びとが生まれるのが現実である。これは、現在の言葉でいえば、「勝ち組」と「負け組」ということであらう。

さて、師は、アジアの諸地域で、第一次産業をもとに暮らす人びとの生活によりそい、先に指摘したように、たとえば、たった千円があれば経済的に自立できるにも関わらず、その千円を架空経済を背景にして利子を生ずる金融システムの中で借りてしまったがために（師にいわせれば、借りさせられたために）生涯をかけてといってよいほど、利子を返し続けなければならない人びとがおり、また、そうした経済システムに乗って、巨万の富が偏在していることになるという。

○利子をどう捉えるか？

さて、西洋の経済は、相手との取引から利潤を生み出すということを前提として成り立っている。この経済の発想のもとなるのは、自分と相手を主客二分して判断することであると私は受けとめた。そのように関係性を二分することによって私たちは相手を対象化、客観化することができる。そして、そのような関係性に立つか

からこそ、相手を切り離れた私がいくらでも利潤としての利子を受け
る事に何ら倫理的問題を考えなくてもいいシステムをつくり出した
といえよう。

つまり、西洋の発想を背景として成り立つ経済の利子というシス
テムは、相手との関係性の中で、金銭を合法的に移行する措置とし
て十分に機能し、またそれが次の利子を合法的に獲得することを可
能にしている。こうした経済市場において利子という利潤を求めよ
うとする投資家がいるかぎり、その利子を補完するために、利子を
常に生み出す提供者を担保していなければこのシステムは成り立た
ず、そこに架空の金銭が動くということになる。

もっとも、塩沢教授によれば、この利子こそが近代経済における
妥当な概念であり、それが経済的な進展と文化の享受を担保してき
たと主張し、ある意味で井本師と塩沢氏両者の立場が主張する問題
点は全くの平行線であるといえる。とすれば、これは世界認識、人
間観の問題に帰結せざるを得ないからこそ、この近代の経済を問題
にすることはそのまま宗教問題として、つまり人間の生き方そのも
のに帰るといえよう。

さて一方、東洋の発想は、主客二元という分別の論理を見据えつ
つも、なお、自他一体の縁起の論理がもとにある。このことは端的
に、明治維新以降、日本に自然という視点が生まれたことにもその
問題性の背景が伺える。明治以前、もともと自然と書いて「じねん」
と呼ぶのが、日本では一般的であった。

その自然は、ものごとが縁起によって自ずとそうなっていること
を示す言葉である。明治以降、海や山などを自分を離れた対象的で
客観的な自然（しぜん）として受けとめる感覚を日本人は受容して
きたが、それ以前は自他一体の縁起観がもとになっていたといえよ
う。アイヌ民族の言葉でも対象的な自然（しぜん）という概念を示

す単語そのものはなかったという。

私が、井本師の提起している経済システムから類推するのは以下の通りである。私たちは今まで、西洋の主客二元の論理から生まれた経済を当たり前にしてしまっている。しかし、私とあなたは同じいのちを分け合っている、そして、今お互いがお互いのいのちを生きているから、たまたま貸借関係という経済的な縁が成り立っていると受けとめるのが自然で、理にかなっている。

仏陀銀行では基本通貨単位をボーディ（目覚め）と呼び、利子の代わりに貸出し金の一部を地方で通用するチケット（地域通貨）として返還する。それによって、地域での具体的な「はたらき」（職能）をやり取りするという経済行為を提唱している。

例えば自転車屋ならその技術を、マッサージの上手な人はその技術を金利の代わりとして、すなわち地方通貨として返済に充てるのだ。そして、これらのやり取りが結果として地域の経済循環を活性化していく。つまり地域経済においては、小規模融資の方が、経済市場原理融資（金利を前提とした金融活動）より、縁起している社会に適合した金融であるという理解だ。

さらにこの銀行を提唱し地方のサンガ（共同体）内での経済循環社会を目指そうとすとき、大変有用な既存の信用組織が寺という仏教文化を中心とした檀家制度という職能集団であり、それが持っているネットワークが、非常に有効な手段となっているという。

仏陀銀行の提唱は、私たちの生き方の置き場所を経済価値の生き方から、支え合い分かち合う縁起価値への生き方への変換が問われているといえよう。何故なら私たちは、余りにも大きな金融制度の破綻を目の前にしているからだ。

結語、経済原理と人間の欲の相剋

全日本仏教会の顧問も務める長谷川法律事務所の所長、長谷川正浩師が、2009年1月第17号「所報」に、「資本主義を暴走させないために～教学は何ができるか」という大変興味深い提言をされていた。この教学とは無論、仏教の教学である。

その要旨は、今の人減らしが当たり前という今の状況を見ると、今までのあり方から現在の対策に至るまで「釈然としないところがある」という。

つまり日本の輸出産業ひとつをとっても、円安・ドル高の恩恵を受け、さらに低い公定歩合が後押ししてきた。ところが世界的な経済危機の折、デフレ対策といわれながらも、政府が安い公定歩合で輸出産業を保護した結果、昨年（08年）末は、不況・円高を理由に経営者たちは首の切り放題となった。そして非正規社員となったのは自己責任と主張するけれど、彼らは人件費の安い外国企業に対抗するコスト抑制の犠牲ではないかと長谷川師は指摘する。

そしてさらに円高バブルは、やがてはじけると十分に予想されていたにも関わらず、昨年末（08年）、首を切られた社員には寮で過ごさせる費用すら残っていないというが、それまで何千億円、何兆円という営業利益はどこにいったのかと長谷川師は憤慨する。そして、彼らを税金で面倒を見なければならないというのもっともだけれど、今のような理由で釈然としないというのである。

師は、この問題は、かつて、資本主義か社会主義かと議論されたが今は、暴走資本主義か修正資本主義かという選択になっているという。前者の大企業経営者の思いのままだと、下請け会社と労働者が破滅し、資本主義事態が破滅すると長谷川正浩師は論じる。

師は、マックス・ウェーバーは、「プロテスタンティズムの精神

が資本主義の健全な発展をうながした」、そして、鈴木正三は、「労働は仏行である」として、その時代の人間と台頭する経済を宗教との関係から健全なものに位置づけたという。（以上、所報より抄出）

実際、正三は、在家の人びとに『萬民徳用』で「世法即仏法」や「職分仏行説」という仏教倫理を勧め、日々の職業生活を仏教に裏づけられた職業倫理として説くことで、江戸時代に利潤の正当性を主張した。正三は、それが正当であるため、①正直、②社会貢献、そして、③短期的利益でなく長期視点を重視した。それによってある程度の経済的な倫理観や利潤万能主義の弊害を回避することが予想されたのである。

正三は、世間の職業に励むことが出世間の仏道に通ずるものだとし、在家生活を通して仏教を生活倫理に深めたことは、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と同じ発想だと、山崎和邦氏は指摘している。⁽²⁾

長谷川師は、「日本では仏教の、西欧ではプロテスタントの、それぞれの価値観が経営者の行動規範となって資本主義を健全なものにしたといわれている。」と指摘している。

仏陀銀行の提起する問題は、既に商業が、いわんや、虚構の経済活動である金利を求めることに何の倫理的矛盾も持たない現代社会に、仏教という生き方を通して、どう切り込んでいけるかが問われている。またそれは、仏教の生きているアジアの諸地域において、今までの西欧金融市場主義者たちの格好の餌食となっていた多くの人びとの啓発と、それを支援する意識ある先進国の人びとの有機的なつながりによって、可能性のある新しい金融システムを提起すると思われる。

参考図書

内山節『日本の「むら」から未来を想像する』農文社

注

- 1) 西光義秀「地域づくりツールとしての地域通貨」、九州龍谷短期大学紀要 50pp.39-57、2004.03.12
- 2) 山崎和邦『詐欺師と虚業家の華麗な稼ぎ方 人はこうして騙される』中経出版（05年11月）